



植田日銀新総裁は黒田前総裁と同じ穴のムジナ

ご二人の何が同じなのか。

それは「物価はモノとサービスの需給で決まる」という大原則を百も承知しながら、何故かこれを無視して、金融政策だけで物価目標を達成しようとする点である。

植田氏は1998年から2005年まで7年間で日銀政策決定会合の審議委員を務めたが、1999年3月25日の政策決定会合で、デフレ対策と景気浮上の為の「ゼロ金利政策」の廃止を決定する際、「景気が本格的に立ち直るまで続ける」という強いメッセージを市場に与えるべきだと主張した。

これが植田氏の有名な「時間軸効果説」である。

2000年8月、日銀は景気が持ち直してきたことから政策決定会合でゼロ金利解除を決めたが、植田氏は、景気回復は完全ではないと主張、(私の実践経済セミナーにご意見番として欠かさずご参加下さった今は亡き)中原伸之先生と共に反対票を投じた。

その後、お二人の危惧通り景気が悪化してきたので2001年3月日銀は再びゼロ金利政策に戻った。

黒田氏が「物価が2%になるまで緩和を続行する」と言い続けてきたのは植田氏の「時間軸効果」に他ならない。

私ごときが言うのは僭越極まりないが、黒田、植田ご二人とも金融政策だけで物価目標を達成出来ると言うのは「思い上がり」に他ならない。

「物価はモノとサービスの需給で決まる」は動かしがたい「原則」である。

「物価を左右する第一義的能力は財務省にあり日銀にはない」。

通貨の価値を下げて物価を上げるのは「ギミック」であり本筋から外れている。

財務省の財政出動に依って内需を喚起する「手助け」をするのが日銀の務めである。

デフレの痛みを一時的に和らげるカンフル剤が日銀であって病根を手術で除去するのは財務省である。

カンフル剤を病気が治るまで投与し続ける「時間軸効果」は元より間違いである。

私は黒田総裁が、物価目標2%を掲げた異次元緩和政策を発表した2013年4月4日の直後、「時事直言」(私の無料情報誌)で「2%のインフレ率など空想に等しい」と述べた。

何時までカンフル剤を投与しても病は直らない。

黒田氏が10年も続けて来た「異次元金融緩和は百害あって一利なし」であり、黒田氏の言う「効果が副作用より大きかった」は「円安は日本経済にプラス」(決定会合後の記者会見で記者から円安政策でインフレを煽っているのではないかの質問に対する返答)と同じく権威を笠にした「大嘘」である。

人口も減少、GDPも下降線、今や外需依存から内需依存になっている日本がなくてはならないのは(財界の反対を押し切って)勇気をもって不要産業(ゾンビ企業)をリストラして供給を落とし、一方内需拡大政策で需要を喚起して需給のバランスをとることである。

くどいようだが、物価にも景気にも日銀に主導権はなく、日銀は常に財務の補助機関でしかないことを知るべきである。

「我が道を行く日銀は日本の癌である」!